

安楽寺だより

第44号

紙面内容

- 2面 疑問に答える（お仏供・お花）
 3面 定例法話を勤める・荒山 信師
 4面 日本仏教史（補足） 栄西禅師

編集・発行 安楽寺住職 吉田 和良
 名古屋市瑞穂区井戸田町一の八〇
 電話 〇五二（八四一）二六〇六

第3回 王子の「四門出遊」

シッダールタ王子は、知性と教養を備えた青年に成長され、十七歳になって母・マヤーと同じコオリヤ族の王家の娘・ヤシヨードラーと結婚されました。

父・シュッドーダナ王は、誕生の時アシタ仙人が予言したように、王子が出家してしまうのではないかと恐れ、王子にあらゆる贅沢と快樂を与え、宮殿の回りに三重の門を造り、王子が勝手に出ていくことが出来ないようにしました。

ある日、国王の勧めで、王子は郊外の御苑に行こうと馬車に乗り、城の東門を出ると、ひととき醜い老人に会います。お付きの御者に尋ねると「人として生をうけた者は、いつかあのような姿になるのです」と答えます。それを聞いて王子はすぐ宮殿に戻られました。

またある日、王子が南門から出ると、道端で苦しむ病人に会います。尋ねられた御者が、「人は誰でもいつかあのような姿になるのです」と答える

王子あう向きと病死老



と、またすぐに宮殿に戻られました。また暫くして王子は西門から出ると、死者を弔う葬列を見て、御者から「人はいつか必ずあのような姿になるのです」と聞くと、王子はまたまた宮殿に戻られました。

生まれた者は、いつかは老い、病み、そして死を迎えます。この人間にとって本質的な事実は、どんな快樂や贅沢によっても、決してごまかせないものです。

シッダールタ王子は、世の無常な事実を知って、「どのような生きたらよいか」という問いを持ちました。そんな時、今度は王子が北門から出ると、一人のすがすがしい出家修行者（沙門）の姿を目にしました。

沙門は、この世のすべてを無常と知り、家や家族を捨て愛欲を捨て去り、道を求め、ひたすら戒律を守る純粋なところを得るために修行を積んでいました。こうした苦しみをのり越えるための道を歩んでいる沙門の姿を見て、シッダールタ王子は自らの進むべき人生の方向を見つけます。

限りあるいのちを生きる人間にとって、何がほんとうの豊かさなのか、何がほんとうの幸福であり、どうすれば満足が得られるのかを求めていたシッダールタ王子は、沙門の姿に強くこころを打たれました。王子は出家の決意を固めて宮殿に戻りました。

疑問に答える⑦

ご飯を夕方お供え

毎日お仏壇にご飯をお供えしますが、朝は忙しく、夕飯の時に供える時が多いのですが、いいのでしょうか？

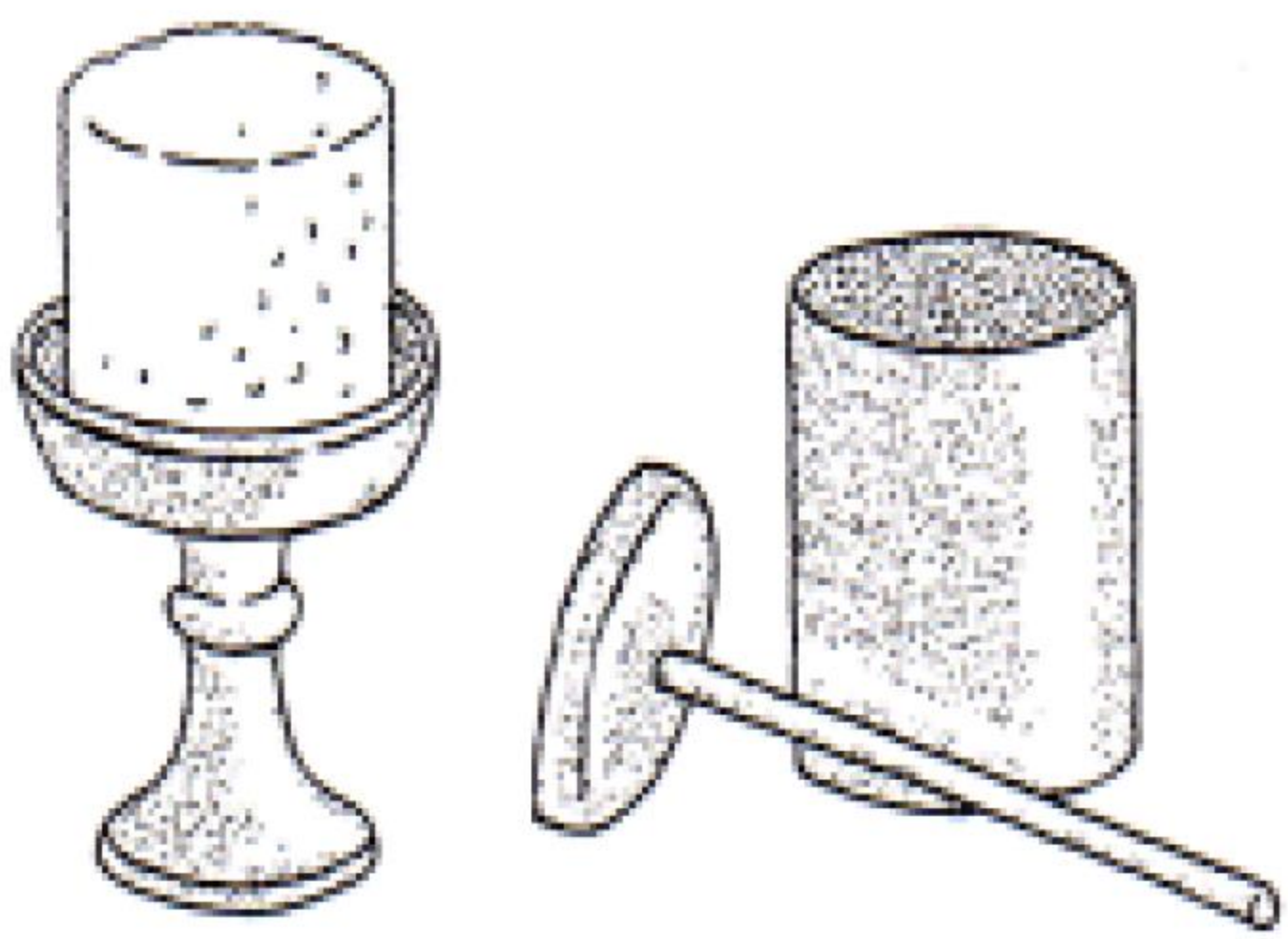
お仏飯（お仏供）は阿弥陀さまへの供物です。私たちの主食であります。朝は忙しく、夕飯の時に供える時が多いのですが、いいのでしょうか？

お仏壇は、浄土世界を表わすものです。お浄土は、この世の延長にあるのではなく、私たちの思いや欲を満たしてくれるところでもないのです。お仏飯は亡くなった方の食事

ではありません。亡き人がお腹を減らしているのではないかと心配することも無いのです。

炊き立てのごはんを、お盛槽（もつそう）を使って筒状に仏飯器に盛ります。大谷派では、蓮実形といい、蓮の実の形に模して盛ります。（本願寺派・高田派では、蓮苔形で、蓮の華のつぼみのような形で盛ります）

そしてお花やお線香・お蠟燭の浄土のお飾り（お荘厳）を整えて、手を合わせる事が何よりも大切です。そして、亡き方々（ご先祖）を偲んでお勤めする毎日を過ごしたものです。



疑問に答える⑧

仏花は造花でも？

家の仏壇には、毎日手を合わせています。仏花も毎日水を替えて、枯れると新しくして供えていました。最近手間に思うようになりました。造花にしようかと思っています。

仏花は、ご本尊・阿弥陀如来の方ではなく、お仏壇の前に座っている私たちの方に向けて供えます。仏花は、単にお飾りではなく、阿弥陀さまの世界から私たちへのはたらきを表わしています。

親鸞聖人は、ご和讃に、『一一(ちいち)のはなのなかよりは三十六百千億の光明てらしてほがらかにいたらぬところはさらになし』

と、詠われ、浄土に咲いている花から光が放たれ、私たちのところに阿弥陀さまの願いが限りなく届けられていと申されます。造花より生花が望ましい理由は、仏教の教



えの根本でもあり、仏縁を促す「無常観」を教えているからだと思います。

確かに造花は手間もかからず、最近においては、見た目では生花とほぼ区別することが難しいくらい色鮮やかに出来ています。

仏花には、阿弥陀さまの徳を讃えると共に、私たちに、清浄なところに出遇ってほしいという願いがかけられています。

仏事には、面倒な事があるとは思いますが、阿弥陀さまの願いに触れて毎日の生活を創造していただけたらと思います。

定例法話勤める

六月十三日、定例法話をお勤めしました。梅雨に入り、あいにくの天気でしたが、五名の皆さまにお参りいただきました。今年も荒山信師（昭和区・恵林寺住職）にご法話をしていただきました。

「昨年来のコロナウイルス感染により、生活に行き詰まり、途方に暮れる方が増加している現在ですが、コロナ禍で学ばせていただくこともあると思います。

三年前に八十六歳で亡くなった父（荒山修師）が、『お寺はオアシスにならないければ・・・』とよく申しておりました。

寺は、生活に疲れた人々がいのちを回復させる場所なのです。阿弥陀さまのお言葉を聞いて、生きる力を回復する、人として生まれてきた意味を確かめさせていただくおしえに出遇うことが、何よりも大切だと思います。

親鸞聖人は、正信偈の最初に『不可思議光』と述べておられます。私は今までその意味がよく解らなかつたのですが、『光』は、阿弥陀さまのはたらきであり、

「寺は生きる力を回復させる場所」

『不可思議光』とは、阿弥陀さまは人を選ばない、誰に対しても届けようという意味ではないかと気付きました。月が輝



いているのは、太陽の光が当たっていることを証明しているように、教えを聞かれた人、照らされた人が、光（念仏のはたらき）を証明しているのです。

あるご門徒様のご法事で、私が、正信偈の調声を称えた時、その家の小学三年生の男の子が、『（亡くなった）おじいちゃんがよく言ってたね』と大きな声で話していました。男の子にとって、正信偈を勤めることは、亡き祖父をよみがえさせる思い出となつています。『後ろ姿を見て育つ』という諺があります。祖父から孫へ念仏のはたらきが確かに伝わっていることを感じました。」

黒田保彦様ご逝去

五十年以上に亘り、安楽寺責任役員をお勤め戴きました黒田保彦様が、

今年七月二十四日にご逝去されました。四十年前に勤めました御遠忌法要

をはじめ、佛佳会再発足（平成六年）安楽寺会館建設（平成十年）などに

ご尽力いただき、ご門徒の皆様の信頼と敬愛を受けてこられました。

謹んで哀悼の意を表します。

安楽寺住職 拝

仏教豆知識

第四十四回



日本仏教史

補足⑧栄西禅師

栄西（一一四一～一二一五）は、備中国（現在の岡山県）に生まれ、地元の安養寺で天台密教を学んだ後、十四歳で比叡山で出家修学しました。

一一六八年（仁安三年）に南宋に留学して、天台教学と当時南宋で繁栄していました禅宗を学び、帰国後、主に博多で禅をひろめました。

一一八七年（文治三年）インドの仏跡巡拝を志して再び入宋しましたが、果せず、天台山万年寺で臨済禅を授かり、日本に戻って『興禅護国論』を著述して、「禅の興隆は最澄の真意にかなう」と主張し、宋で学んだことを生かして、天台宗復興をめざしました。しかし、比叡山から異端扱いされ、弾圧を受けました。

そこで栄西は、当時開かれた鎌倉幕府の

庇護・支援を受けて、京都に建仁寺を開創しました。また、東大寺復興に力を尽くし、一二一五年（健保三年）鎌倉寿福寺で、七十五歳の生涯を閉じました。

栄西は、南宋の禅院で行なわれている、修行の一つ茶礼（さらい）の習慣を研究し、日本に持ち帰りました。禅寺では朝の坐禅・食事のあと、また休憩や就寝前に番茶を飲む、また眠気ざましの効用が説かれていました。

栄西の著述した「喫茶養生記」には、「茶なるものは、末代養生の仙薬、人倫延齡の妙薬なり」と、茶の医学的効能や栽培方法などを述べています。

栄西は、茶を良薬として一般に広め、日本の茶の始祖とも言われています。



お彼岸を迎え、コロナ禍でも虫の音や十五

夜の月・土手に咲く彼岸花など季節の移り変わわりを感じさせてくれます。▼今年8月、国連の機関IPCCが「気候変動に関する報告書」を発表しました。「1850年代（産業革命前）から現在までの170年間に世界の平均気温は、1.06度C上昇しました。しかし、温室効果ガスによって、今後80年間で平均気温が3度C上昇する危機を迎えている」とショックな報告でした。▼酷暑・大型台風・集中豪雨は「気候の危機」の現象と言われています。よくテーマにある「自然との共生」は、人間の飽くなき経済活動によって、困難な時代になりつつあります。▼子孫に日本の四季の素晴らしさ残すことは、今生きている私たちの責務であり、「気候の危機」を克服するために、国民全体で行動することが必要とされているのではないのでしょうか。